

「読解力」が問われる時代、一人一人の子どもに本当の「読解力」を

湧別町立湧別小学校長 秋山 康則

ビジョンと
プロセスの
共有

4月の第1回研修日。研修部が今年度の内容を全体に示しました。「国語の授業を教師が楽しむために！」というわくわくする内容がプレゼン形式で説明され、全員で目指すビジョンとプロセスを共有することができました。

説明の前段、ある調査結果が紹介されました。それは、「体育は楽しい」という児童が多くいるのに対し、「国語は楽しい」という児童はごくわずかしかないという事実でした。

「国語って何ができるようになったか実感できない。」「やらされている感、半端ない。」「国語で学習したことが何に役立つが分からない。」これが理由でした。職員一同、「本校も同じだ。」「楽しい国語の授業を行わなければ…」と、授業改善の必要性を感じたのでした。

そこで、本校では、①「付けたい力を明らかにする」②「言葉と向き合うことの楽しさを感じさせる」③「実生活につなげる工夫を行う」という3つの視点で、教師も子どもも「国語の授業を楽しむ」ことを目指して、実践を進めることにしました。

「言葉の力」
を実感させる

授業を見合う

7月、交流授業がスタートしました。1人1公開(計10回)と多くの授業検討を積み重ねました。このほか、普段の授業を仲間同士で見合って学び合うことや、定期の全体研修ではない自由度のある研修(ミニ研修)なども奨励され、日に日に同僚性も高まっていきました。研修が進むにつれ、学年に応じて「子どもが学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方などに着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めていく」様子を見ることができるようになりました。また、学習の中で身に付けた「言葉の力」(見方・考え方)を、次の学習や他領域、他教科、実生活の中で活かす場面も見られるようになり、子どもは学びを自覚できるようになってきました。

学びの文脈を
創る

このほか、本校は、今年度から学校全体で読書活動に力を注いでいます。とりわけ、地域との連携により、子どもたちの読書環境がずいぶん整備されました。まず、町の図書館との連携により、朝読書の本の貸し出しや定期的な入れ替え、巡回図書の利用、单元の中で並行して読ませたい図書などの準備が円滑に進むようになりました。これまでもお世話になっている地域ボランティアの方々による朝の読み聞かせ(1~3年)に加え、今年度から週3回、全校で朝読書を行うようにしました。これにより、語彙が増えるとともに「読む体力」が鍛えられ、このことが「書く体力」の向上へと波及しています。

チーム読書

外部講師の
活用

さらに、12月には、小学校国語の専門家である樺山敏郎先生(大妻女子大学准教授)をお招きし、直接、指導助言を受けることもできました。樺山先生は、本校の全授業を参観してくださり、「どの学級も、子ども一人一人を大切にしようとしている姿を、まず第一に感じました。そして、どの教室も教室空間(物的・人的)がとても重視され、支援体制が整い、着実に学力の向上が実現されているように思いました。」と評価していただきました。講演では、「多様な子どもたちと共に学びを創る」ために、まず「ゴールイメージ」や「プロセスデザイン」をもち、授業の中に「クライマックス(山場)」や「教師の出番」をつくり、「3つのZ(時間、字数、条件)を設定して子どもに『自分の考え』『根拠や理由』を書き

子どもから
学ぶ

切らせる」、これらのことが大切であると教えてくださいました。研修会終了後には、私たちへ向けて、「思ったとおりにいかないのが授業。だから…子どもから学び、その先へ！」という温かいメッセージもいただきました。

本校の研修は始まったばかりです。それでも、児童アンケート（12月）では、9割以上の児童が「授業がよくわかる」と回答し、「国語がものすごく楽しくなった。」「自分の考えをノートに書く力がすごく上がった。」「本を読むことが多くなった。」「国語のテストで100点をとれるようになった。」など、自分の努力や成長点について、記述欄にびっしりと書いてくれました。子どもたちの変容は、校内の静けさと集中、聴き合う関係、目的ある対話、ノートや成果物、学習評価（各種テスト）など、普段の学びの姿にも表れ始めています。

これからの
展望

さて、これからの学校教育では、「ふるさとに誇りと愛着をもち、未来社会の創り手として必要な資質・能力を身に付け、多様な仲間と共に、新しい価値を生み出していく子ども」が育つ学校づくりを、地域ぐるみで進めていく必要があります。また、来年度から、1人1台のタブレット端末の活用やデジタル教科書の利用により、「これまでの実践」と「ICT活用」をうまく掛け合わせた授業を進めていくことが求められています。

本当の
「読解力」
とは

このような中、(教育には不易と流行がありますが)本校において一層大切にしたいのが「読解力」の育成です。今の「読解力」は、以前と違って「文章の内容を正しく読み取ること」だけでなく、「内容を正しく読み取った上で、自分の意見を述べる」ところまでが求められています。なぜなら、日常生活や社会に出た時、情報を取り出し解釈して熟考・評価する力や、相手の意見を受けた上で自分の考えを論理的に伝える力などは、これからの社会で欠かせない力だからです。

また、「読解力」は、国語の枠にとどまらず、算数や社会、理科の題材を読み取ることも含まれます。文章だけでなく、図式やグラフ、地図などから内容を読み取ることも、これからの社会を生き抜いていくための重要な力となります。

「読解力」は
すべての学び
の土台

こうしたことから、本校では、国語科の授業づくりや読書活動の推進を中心として、子どもたちの「読解力」を伸ばし、そこで身に付けた「言葉の力」を土台として、さまざまな学びに挑戦できる（自ら学びを創る）ことができる子どもを育てたいと考えています。

そのため、「一人一人が問いをもち続け、互いに学び合い、学びを自覚する」姿を目指すゴールの姿とし、今後もチーム湧小で、日常授業の改善に努めてまいります。

結びになりますが、本校の研修推進に当たり、多大なご支援とご協力、ご指導を賜りました湧別町教育委員会、オホーツク教育局、本町の全学校の教職員の皆様に厚く御礼を申し上げ、巻頭の挨拶とさせていただきます。



1月、今年度の研修の成果と課題をもとに来年度へ向けた方向性を検討し、学校全体でビジョンを共有したワークショップの様子